

宮城県図書館の ルーツを訪ねて その2

～公共図書館の先駆 青柳文庫～

明治14年(1881)に「宮城書籍館」^{しよじやくかん}として設置され、今年創立125周年を迎えた宮城県図書館。その歴史をさかのぼると、藩校養賢堂と青柳文庫にたどり着きます。前号の特集「藩校養賢堂とその蔵書」に続いて、公共図書館の祖ともいわれている「青柳文庫」をご紹介します。

青柳文庫とは

「青柳文庫」は、仙台藩出身で江戸で成功した青柳文蔵^{あおやぎぶんぞう}(1761-1839)が、自分の蔵書2,885部9,937冊と文庫の運営基金1,000両を仙台藩に献上して、天保2年(1831)に創設された公開の文庫です。青柳文庫の管理のために仙台藩は事務方として目付2人を置き、蔵書は武士や町人の別なく閲覧・貸出されました。このような青柳文庫の運営方法は、現代の公共図書館に通じるものがあり、わが国における公共図書館のさきがけといわれています。

文庫の建物は、仙台北下百騎丁^{ひのふま}にあった医学校構内(現在の仙台市青葉区一番町、元仙台中央警察署敷地内)の西南隅に建てられ、間口3間2尺5寸(約6.2メートル)、奥行2間2尺5寸(約4.4メートル)ほどの大きさで、土蔵造りでした。青柳文庫は明治維新まで続きました。



戦災で焼失した青柳文庫書庫

青柳文庫の蔵書

青柳文庫の蔵書は、文蔵が収集した蔵書がもとになっており、医学・法律などの専門書から、『太平記』『西遊記』などの読み物類まで幅広い分野の書物で構成されていました。医学に関する蔵書は、文蔵が少壮のころ、町医者であった父のあとを継ごうとして研鑽したことがきっかけになって収集されたと考えられます。本館では『大和本草』などを所蔵しています。また、当時の教養の中心であった儒学、特に文蔵が江戸に出てから学んだ「折衷学派」の書物も所蔵しています。さらに、『令義解』など文蔵が傾倒した法律に関する書物のほか、古銭の収集家でもあった文蔵の自著である『青柳館蔵泉譜』をはじめとする古銭関係の書物が多く所蔵されていることも特色のひとつです。



『近代著述目録』(堤朝風編)



『海国兵談』(林子平著)

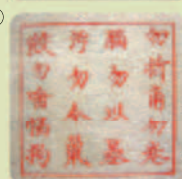


「士民青柳館蔵書借覧ノ図」(斎藤報恩会所蔵「修身図鑑」より)

青柳文庫の蔵書印

青柳文庫の蔵書には、①「青柳館文庫」、②「市井臣文蔵献仙台府書」、③「勿折角勿卷脳勿以墨汚勿令鼠齧勿唾幅掲」の3種類の蔵書印が押されています。

①「青柳館文庫」の印は、青柳文蔵個人の蔵書印であり、仙台藩への献納以前に押されたものです。②「市井臣文蔵献仙台府書」(市井の臣文蔵仙台府に献ずる書)は、青柳文蔵が仙台藩に蔵書を献納したときの印です。③「勿折角勿卷脳勿以墨汚勿令鼠齧勿唾幅掲」(角を折る勿れ 脳を巻く勿れ 墨を以て汚す勿れ 鼠をして齧まむる勿れ 幅に唾して掲る勿れ)の印も献納に際して押されました。これは、「本の角を折らないこと、本の背を丸めないこと、墨で汚さないこと、鼠にかじらせないこと、唾をつけてめくらないこと」の意味で、利用にあたっての心得を述べたものです。これらは、図書館資料利用のマナーとして現代でも十分通用するものといえるでしょう。



蔵書印3種

青柳文庫のその後

明治維新後、青柳文庫は廃止され、蔵書は散逸を余儀なくされました。明治7年(1874)に宮城師範学校の校舎が勾当台に落成し、蔵書の一部は同校へと引き継がれました。明治14年(1881)宮城師範学校の校舎の一部を借りて、宮城県図書館の前身である「宮城書籍館」が創設された際に、宮城師範学校から青柳文庫の大半が引き継がれました。第二次世界大戦時には疎開により焼失をまぬがれ、現在宮城県図書館が所蔵しているのは459部3,339冊です。「養賢堂文庫」(旧仙台藩校養賢堂の蔵書)とともに、この青柳文庫の蔵書が宮城県図書館の蔵書の母体となりました。

他に、青柳文庫を所蔵している機関として、宮城教育大学附属図書館、国立国会図書館、仙台市民図書館、東北大学附属図書館、斎藤報恩会、仙台市博物館などがあります。